

都市祭礼における 「祝祭性」の民俗学的研究

(2019年度学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)に採択)



社会学部
現代社会学科
阿南 透 教授

本研究は、過去2回の科学研究費補助金交付研究を引き継いで発展させるものである。すなわち「祭礼における『暴力』の発生と解決の民俗学的研究」(平成23〜26年度)では、「喧嘩祭」として知られる祭礼を調査し、警察規制や条例制定により祭礼が変化した経緯を示した。続く「都市祭礼における『競技化』の民俗学的研究」(平成27〜30年度)では、祭礼の変化について「競技化」の観点から研究し、山車をぶつける「喧嘩祭」が、ルールを決めてぶつけあう祭りに変化する「脱暴力化」の実態を示した。また、踊りや灯籠の出来映えを審査し得点で優劣を競う、いわば採点競技となった祭礼として「青森ねぶた祭」や「よさこい系」の祭礼を調査した。いずれも「競技化」が、人々の関心を集中し力を結集する仕組みとして機能していることが明らかになった。これらの研究を受けて、今回は祭礼の

「祝祭性」をテーマに調査研究を行う。メンバーは、研究代表者・阿南のほか、共同研究者として内田忠賢(奈良女子大学教授)、有本尚央(甲南女子大学准教授)、協力者として中里亮平(長野大学講師)、森戸日咲子(筑波大学大学院)が参加する。

今回のキーワード「祝祭性」は、松平誠らの研究に倣い、個人が祭礼を通じて自己充実を獲得する要因とする。その上で、民俗学の祭礼研究と社会学理論を援用して、自己充足や満足感をもたらす要因について明らかにすることを目的とする。

具体的には3つの視点から祭礼を研究する。第1は「スペクタクル」である。見た者を驚かさずさまざまな工夫は日本の都市祭礼に伝統的に見られる。主催者は、山鉾屋台や灯籠の豪華絢爛たる装飾や、芸能や囃子の音曲など、見物人や他の参加者を驚かせる工夫に意を

配ってきた。

第2は「スリル」である。喧嘩祭やだんじりを高速で走らせる祭礼など、力を発揮する祭礼の極限状況でスリルを感じることは言うまでもない。また、祭礼が身体行為である以上、動作をする際の感覚にも注意を向ける必要がある。

第3は「オーセンシティブ」である。日本の都市祭礼では、祭礼を文化資源として観光利用する動きが活発になっているが、そのためには祭礼の文化財指定や、ユネスコ無形文化遺産の指定が効果的と考えられている。また、祭礼を統制し管理下に置こうとする警察に対抗するため、祭礼の当事者が伝統や文化財指定の事実を持ち出して対抗する現象も見られる。このように3つの観点から現代の祭礼を研究し、3期にわたった研究を総括することを考えている。

科学研究費補助金(学術研究助成基金助成金)が交付された研究を紹介します。